

2018（平成30）年度 京都大学 入試問題 文系 第2問 解答例

問一

喫煙と坐業で衰弱した躰が、急に夜半過ぎの清浄な空気に触れ、体内の異状を感知して、拒絶反応を起こすということ。

* 「(不節制な躰の、いわば) 戸惑い (といったもの)」とは、本文に従えば、「(躰が自分の内側の腐敗の気を嗅ぎ取り、) うしろめたく感じる (のだ)」と擬人的心理的表現によって説明されている。この比喩解釈がポイントとなるので、単なる過敏さといった表面的な説明では解答とは言えない。

問二

歩いていた男を車のライトが突然普通ではない位置と方向から照らし、男の影を遠く離れた壁に映したということ。

* 「ふいに・妙なところで・妙な風に向きを変えて」の三要素を正確に解答化する。

問三

もとは誰かと何らかの理由で飲み始めた酒であっても、酔って一人で夜道を帰るところまで来れば、もはや他人も家庭や仕事も今は気にかけず、歩くたびに改めてかすかにまわってくる酔いを気ままに発散していられるということ。

* 「もう」「自分一人の酔いで」あるとは、「ここまで来れば、もはや」「(仕事であれ家であれ) 誰にも気がねなく」である。

* 初歩的なことだが、「ほのぼの」のような擬態語(声喩)をそのまま解答に用いないこと。

問四

酔いが発散しない「私」は、気ままに酔っている男の状態を羨ましく思いつつ、歩み去る男の影だけが壁に映じていたので、それを一瞬自身の影と錯覚し、自分自身が日常から逃れて気ままに歩み去って行くのを見送るように感じたから。

* 解答要素として、そもそも「解放感」を覚える心理的前提である「(日常の生から) 自分が歩み去っていくような」ことへの願望を説明しなければならず、さらにそのことを保証する「男の今の状態(問三)をうらやましく思った」という記述に触れねばならない。また、男の影を「自分自身の影と思った」という「奇妙な」錯覚が可能な理由として、「影が一人勝手に歩き出して」いるように見えるという物理的前提も説明しておくこと。

問五

人間には、仕事や家庭に拘束された、自覚的に送っている日常生活とは別に、無自覚なまま見知らぬ他者に自身の存在が認められ、交渉を持ち、感応させもするという、無意識的で日常から解放された人生の一面もあるということ。

*（自分が他人の影に感応したように、）自分の影に無自覚なまま他人を感応させるという面もある。京大の随想問題でしばしば見られるように、ここでもそれを「影」という光学的物理的問題としてではなく、人間の生活・人生・社会の事柄として説明する。「影」という語は用いないのである。

*単に「光／影」「意識／無意識」「陰陽二重の人生・生活」という認識では不足である。うらやむべき、解放された非日常的な生への憧憬の想いがある。